



# 日本植物分類学会

## ニュースレター

No. 5

May 2002

### 目 次

北村四郎先生ご逝去のお知らせ.....	2
諸報告	
日本植物分類学会評議員会議事抄録.....	2
日本植物分類学会総会議事抄録.....	4
2001年度事業報告書並びに2002年度事業計画.....	6
2001年度会計決算報告.....	8
2002年度会計予算.....	9
細則の新設・変更について.....	10
2003年度大会開催地について.....	10
新しい絶滅危惧専門第一委員会について.....	10
自然史学会連合報告.....	12
第18期日本学術会議古生物学研究連絡委員会第5回報告.....	14
学会からのお知らせ	
会費納入のお願いと自動振替利用のお知らせ.....	15
平成14(2002)年度野外研修会のお知らせ.....	16
日本植物分類学会次期(2003、2004年度)会長ならびに評議員選挙のお知らせ.....	18
書籍の割引のお知らせ.....	18
日本植物分類学会 第1回大会を終えて.....	19
大会運営についての意見.....	20
「日本地衣学会(The Japanese Society for Lichenology)」設立のお知らせ.....	21
平成14年度自然史セミナー「菌類の多様性と分類(前期)」のご案内.....	23
鹿児島大学農学部植物標本室(KAG)について.....	24
大阪市立自然史博物館植物標本庫(OSA)について.....	25
連絡員から春便り	
亜熱帯の島便り・2・.....	28
シダ便り・2・.....	30
コケ便り・臨時・.....	34
会員消息.....	35

## 北村四郎先生ご逝去のお知らせ

---

会長 加藤雅啓

京都大学名誉教授北村四郎先生（本学会名誉会員）には去る平成14年3月21日お亡くなりになりました。ここに慎んでお知らせいたします。

北村先生は植物分類学の世界の権威であるばかりでなく、本学会の前身であった植物分類地理学会の設立と発展にこの上ないご貢献をされ、さらに旧日本植物分類学会にも設立当初から深くかかわっておられました。本学会が今日あるのは北村先生のご尽力によるところが極めて大きいことは衆目の一致するところですが、このように、先生の95年のご生涯はわが国における植物分類学の発展の足跡であったと言っても過言ではありません。本学会として北村先生を追悼する企画を、編集委員会などで考えているところです。

北村四郎先生のご冥福を改めてお祈り申し上げます。

## 諸報告

---

### 日本植物分類学会評議員会議事抄録

---

庶務幹事 梶田忠

日時：2002年3月15日 18:00～20:00

会場：国立科学博物館新宿分館研究棟2階会議室

評議員出席者：角野康郎、川井浩史、北川尚史、田村実、西田治文、原田浩

幹事会等出席（）内は役職：加藤（会長）、梶田（庶務）、岡田（編集委員長）、布施（図書）、

綿野（植物分類学会連合連絡会）、藤井（ホームページ）、西田佐知子（ニューズレター）、西田治文（自然史学会連合）、井上（絶滅危惧植物専門第一委員会委員長）

- ・開会に先立ち会長から挨拶があった。
- ・梶田庶務幹事により、定足数が確認された。評議員出席6、会長1、委任状出席5で本評議員会は成立した。
- ・西田治文氏が議長に選出された。

#### 1. 報告事項

各担当幹事・役員から、以下の項目について報告がなされた。

- 1 会務報告 2001年度事業報告、会員状況、その他について。
- 2 会計報告 2001年度会計収支決算、会費自動振り込みについて。
- 3 出版物に関する報告 英文誌・和文誌の編集状況について。

- 4 ニュースレターに関する報告 ニュースレターの出版状況と発送方法について。
- 5 図書関連報告 出版物の発行数と交換・寄贈状況について。2001年9月の評議員会で審議された交換雑誌の問題について。
- 6 植物分類学関連学会連絡会報告
- 7 ホームページ関連報告
- 8 関西地区講演会報告 2002年度の関西地区講演会について。
- 9 自然史学会連合関連報告
- 10 各種委員会に関する報告
  - ・学会賞審査委員会 2001年度の学会賞受賞者と選考理由等について。
  - ・植物データベース専門委員会
  - ・絶滅危惧植物専門第一委員会
  - ・絶滅危惧植物専門第二委員会
- 11 その他報告事項
  - ・国立情報学研究所電子図書サービスへの参加について
  - ・APG インデックスのホームページ上での公開について
  - ・学術刊行物指定について
  - ・学会ロゴマークについて
  - ・次期会長・評議員選挙について

## 2. 審議事項

- 1 2001年度事業報告書(案)について  
梶田庶務幹事から説明がなされた。審議の結果、事業報告書(案)が承認された。
- 2 2001年度決算報告書(案)について  
梶田庶務幹事から説明がなされた。審議の結果、決算報告書(案)が語句を一部訂正の上で承認された。また、評議員から会費納入率が悪い点について意見が出され、会場で年会費を受け付けることや、未納会員に重ねてお願いするなどの方法が必要であるとの意見が出た。
- 3 2002年度事業計画(案)について  
梶田庶務幹事から説明がなされた。審議の結果、事業計画(案)が承認された。
- 4 2002年度予算(案)について  
梶田庶務幹事から説明がなされた。審議の結果、予算(案)が承認された。
- 5 日本分類学会連合への加盟について  
綿野植物分類学関連学会連絡会担当幹事から説明がなされた。審議の結果、日本分類学会連合への加盟が承認された。

## 6 細則変更：議事録についての新細則

梶田庶務幹事から、議事録に関する細則新設について説明がなされた。審議の結果、一部字句訂正の上で承認された。また、本評議員会の議事録署名人には、加藤・原田両氏が選出された。

## 7 細則変更：学会賞審査委員会の名称変更

梶田庶務幹事から、学会賞審査委員会の名称変更について説明があった。審議の結果、承認された。

## 8 会則変更：編集長の任期変更

この議案については、次回以降に再検討することになった。

## 9 次期監事の選出について

次期監事候補者として、栗林実氏と高橋弘氏が推薦された。

## 10 その他

## ・第2回大会開催地について

2003年3月14日～16日に神戸大学で行うことが、本評議員会で決定された。

## ・メール評議員会について

評議員会での協議が緊急に必要であると会長が判断した案件(期限のあるものなど)については、メール会議(電子メール・書簡・ファックスなどの媒体を介した会議)で協議することが決定された。

## 日本植物分類学会総会議事抄録

庶務幹事 梶田忠

日時： 2002年3月16日 12:00 - 13:00

場所： 国立科学博物館分館

- ・総会に先立ち加藤会長から挨拶があった。
- ・西田治文氏が議長に選出された。

### I. 審議事項

第一号議案 2001年度事業報告書並びに2002年度事業計画案承認の件

梶田庶務幹事から説明があった(p6, 7を参照)。審議の結果、異議無く承認された。

第二号議案 2001年度決算報告書並びに2002年度予算案承認の件

高野会計幹事から説明があった(p8, 9を参照)。高橋弘監事から2001年度決算報告書について監査報告がなされた。審議の結果、異議無く承認された。

### 第三号議案 日本分類学会連合への加盟の件

綿野植物分類学会連合連絡会担当幹事から説明がなされた。審議の結果、日本分類学会連合への加盟が異議無く承認された。

### 第四号議案 議事録についての新細則設立の件

梶田庶務幹事から説明がなされた。審議の結果、新細則の設立が異議無く承認された。これに伴い、本総会の議事録署名人として、原田浩氏と加藤雅啓氏が選出された。

### 第五号議案 学会賞審査委員会についての細則変更の件

梶田庶務幹事から説明がなされた。審議の結果、細則の変更が異議無く承認された。

### 第六号議案 次期監事選出の件

梶田庶務幹事から説明がなされた。審議の結果、次期監事として栗林実氏と高橋弘氏が選出された。

## II. 報告事項

### 自然史学会連合関連報告

西田自然史学会連合担当委員から活動報告がなされた。

### 絶滅危惧植物専門第一委員会報告

井上絶滅危惧植物専門第一委員会委員長から活動報告がなされた。

### IAPT シンポジウム 2004 準備委員会報告

加藤 IAPT シンポジウム 2004 準備委員から活動報告がなされた。

### 学会誌に関する報告

岡田編集委員長から学会誌の出版状況について報告がなされた。

### 2003 年度大会について

梶田庶務幹事から2003年度の大会開催地と日程について報告がなされた。大会準備委員の渡邊邦明氏から挨拶があった。

### 次期会長・評議員選挙について

梶田庶務幹事から次期会長・評議員選挙について説明がなされた。

### 会費の自動振替導入について

高野会計幹事から、会費の自動振替導入について報告があり、会員各位への参加のお願いが重ねて行われた。

## 2001 年度事業報告書並びに 2002 年度事業計画

庶務幹事 梶田忠

先頃行われた総会と評議員会において、昨年度事業報告書と今年度事業計画が承認されましたので、会員各位にお知らせします。

### 2001 年度事業報告書

#### (1) 学術集会、講演会、講習会等の開催

- ・ 設立記念国際シンポジウム 2001 年 5 月 12, 13 日 京大会館 参加者 141 名
- ・ 野外研修会の開催 2001 年 7 月 20 ~ 22 日 東京大学大学院生命科学研究科附属科学の森教育研究センター秩父演習林 参加者 13 名
- ・ 関西地区講演会 2001 年度は開催せず。

#### (2) 英文雑誌、和文雑誌、その他ニュースの出版物等の刊行

- ・ 学会誌の発行 英文誌: Acta Phytotaxonomica et Geobotanica vol. 52 (1) の発行  
和文誌: 日本植物分類学会誌創刊号を発行
- ・ ニュースレター No. 1, 2, 3 を発行

#### (3) 調査及び研究

- ・ 絶滅危惧植物専門第一委員会の活動
- ・ 絶滅危惧植物専門第二委員会の活動
- ・ 植物データベース専門委員会の活動

#### (4) 調査及び研究の業績の表彰、その他調査及び研究の奨励

- ・ 日本植物分類学会賞の選考

#### (5) 国内外の関係学術団体との連携及び協力

- ・ 学会連合等との連絡: 日本学術会議、植物分類学関連学会連絡会、自然史連合など
- ・ 植物分類学関連学会合同名簿の発行
- ・ IAPT2004 準備委員会の活動

#### (6) その他

- ・ 植物分類学関連情報(学術集会、研究動向、出版物、公募)を収集し、ニュースレター、ホームページ等で提供した
- ・ 学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換
- ・ バックナンバーの販売
- ・ 植物分類学マニュアルの編集

**2002年度事業計画**

## (1) 学術集会、講演会、講習会等の開催

- ・関西地区講演会の開催 大阪市立自然史博物館 (2002年1月20日)
- ・年次学術集会(日本植物分類学会第1回大会)の開催  
国立科学博物館新宿分館 3日間(2002年3月15日~17日)
- ・野外研修会の開催 宮崎県中部・北部 2002年9月27~29日 世話人:南谷忠志氏

## (2) 英文雑誌、和文雑誌、その他ニュース等の出版物の刊行

- ・学会誌の発行  
英文誌: Acta Phytotaxonomica et Geobotanica vol.52(2), Vol.53(1), (2) 3冊  
和文誌: 日本植物分類学会誌 第2巻1号, 2号 2冊
- ・ニュースレターの発行 No. 4, 5, 6, 7 4冊

## (3) 調査及び研究

- ・絶滅危惧植物専門第一委員会の活動
- ・絶滅危惧植物専門第二委員会の活動
- ・植物データベース専門委員会の活動

## (4) 調査及び研究の業績の表彰、その他調査及び研究の奨励

- ・日本植物分類学会賞の選考と授与 第1回大会総会(2002年3月)で表彰

## (5) 国内外の関係学術団体との連携及び協力

- ・学会連合等との連絡: 日本学術会議、植物分類学関連学会連絡会、自然史連合など
- ・IAPT2004準備委員会の活動

## (6) その他

- ・バックナンバーの販売
- ・植物分類学関連情報(学術集会、研究動向、出版物、公募)を収集し、ニュースレター、ホームページ等で提供
- ・学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換
- ・植物分類学マニュアルの編集・刊行

## 2001年度会計決算報告

通常会計		2001.6 予算	2001.12. 決算	予算との差		
収入	設立準備金	4,168,654	4,168,654	0		
	会費					
	一般会員	5,000 700	3,500,000	2,238,000	1,262,000	
	学生会員	3,000	80	240,000	78,000	162,000
	団体会員	8,000	50	400,000	104,000	296,000
	別刷り	180,000	2	360,000	207,520	152,480
	バックナンバー販売		50,000	1,870,400		-1,820,400
	利息			7		
	雑収入		0	558,566		-558,566
	小計		4,600,000	5,056,493		(456,493)
	合計		8,768,654	9,225,147		(456,493)
支出	印刷費					
	APG 印刷費	1,000,000	2	2,000,000	798,346	1,201,654
	別刷り・カラー印刷費	180,000	2	360,000	113,484	246,516
	和文誌印刷費	400,000	1	400,000	630,892	-230,892
	ニュース印刷費	60,000	3	180,000	138,726	41,274
	封筒等印刷費			150,000	219,662	-69,662
	送料・通信費					
	APG 送料	110	2,000	220,000	233,600	-13,600
	和文誌1巻 + NL11月号送料	120	1,000	120,000	317,640	-197,640
	NL8月号送料	110	3,000	330,000	108,780	221,220
	その他小包など			200,000	181,510	18,490
	事務費					
	消耗品費			50,000	19,206	30,794
	アルバイト賃金			50,000	75,014	-25,014
	自然誌学会連合負担金			20,000	20,000	0
	総会費					0
	大会補助費			0	0	0
	会議費			130,000	49,480	80,520
	編集費			180,000	68,135	111,865
	手数料・その他			30,000	3,780	26,220
	予備費			300,000	328,424	-28,424
	合同名簿分担金			200,000	155,494	44,506
	小計		4,920,000	3,462,173		1,457,827
	次年度への繰越		3,848,654	5,762,974		-1,914,320
	合計		8,768,654	8,126,076		642,578

\*備考 2001年度会費納入済み 一般会員：734人中 391人 学生会員：63人中 27人

特別会計		2001.6 予算	2001.12 決算	予算との差
収入	前年度繰越金	1,647,343	1,647,343	0
	新学会設立記念国際シンポジウム残金		240,000	-240,000
	利息	1,000	0	1,000
	合計	1,648,343	1,887,343	-239,000
支出	次年度への繰越金	1,648,343	1,887,343	-239,000
	合計	1,648,343	1,887,343	-239,000



## 2002年度会計予算

通常会計				
収入	繰越金		5,762,974	
	会費			
	一般会員	5,000	740	3,700,000
	学生会員	3,000	70	210,000
	団体会員	8,000	40	320,000
	別刷り ( A P G )	180,000	3	540,000
	別刷り ( 分類 )	40,000	2	80,000
	バックナンバー販売			50,000
	利息			0
	雑収入			50,000
	小計			4,950,000
	合計			10,712,974
	支出	印刷費		
		APG ( 52(2), 53(1), 53(2) ) 印刷費	1,000,000	3
APG 別刷り・カラー印刷費		180,000	3	540,000
和文誌印刷費 ( 2(1), 2(2) )		500,000	2	1,000,000
分類別刷り代		150,000	2	300,000
ニュース印刷費		60,000	4	240,000
封筒等印刷費				150,000
送料・通信費				
APG 送料		110	3,000	330,000
和文誌送料		120	2,000	240,000
ニュース送料		110	3,000	330,000
その他小包など				200,000
事務費				
消耗品費				50,000
アルバイト賃金 ( 含発送代行 )				180,000
自然史学会連合負担金				20,000
総会費				0
学会賞賞金・表彰		30,000	2	60,000
大会補助費				100,000
会議費				130,000
編集費				180,000
手数料・その他				30,000
自動振替口座確認手数料		100	800	80,000
予備費			200,000	
小計			7,360,000	
次年度への繰越			3,352,974	
合計			10,712,974	
特別会計				
収入	前年度繰越金		1,887,343	
	利息		180	
	合計		1,887,523	
支出	次年度への繰越金		1,887,523	
	合計		1,887,523	

## 細則の新設・変更について

庶務幹事 梶田忠

先頃行われた総会と評議員会において、細則の新設と変更が決定しましたので、会員各位にお知らせします。

- ・次の細則が新設されました。

議事録についての細則

第1条 総会、評議員会には議事録を作成し、議長及び出席者代表2名以上が署名押印しなければならない。

附則 本細則は、2002年3月16日よりこれを実施する。

- ・学会賞についての細則第2条、第3条に記載の「学会賞審査委員会」の名称が「学会賞選考委員会」に変更されました。変更後の条文は、以下の通りです。

第2条 学会賞は、自薦、他薦を問わず推薦された会員の中から、学会賞選考委員会により選ばれた者に授与する。

第3条 学会賞選考委員会は、会則第14条(1)の3に準じて設け、若干名の委員により構成する。

附則 本細則は、2002年3月16日よりこれを実施する。

## 2003年度大会開催地について

庶務幹事 梶田忠

先頃行われた評議員会において、2003年度に行われる日本植物分類学会第2回大会の日程と開催地が下記のように決定されました。

開催地： 神戸大学

日程： 2003年3月14日(金)～16日(日)

準備委員： 渡邊邦秋、工藤 洋、川井浩史、神谷充伸、角野康郎、小菅桂子

## 新しい絶滅危惧植物専門第一委員会について

信州大学 井上健

絶滅危惧植物専門第一委員会—この漢字が13個もつながる委員会は書いている当人もうんざりするのでは、単に絶滅危惧第一委員会と呼ぶことにします(これでも充分長いです)。この委員会は旧日本植物分類学会の中にあつた委員会の一つで、維管束植物の絶

滅危惧植物に関する諸問題を取り扱ってきました。ちなみに第二委員会では非維管束植物を対象にしています。旧第一委員会は矢原さんが10年間委員長を務め、その間に旧レッドデータブック（日本自然保護協会から発行された物です）の普及版の発行、環境庁版レッドリストの作成への協力、環境庁版レッドデータブックの作成への協力、など様々な面で実績を挙げてきました。

学会が統合し、新しい日本植物分類学会が結成され、絶滅危惧第一委員会も存続することになりましたが、前委員長の矢原さんより、そろそろ委員長を交代したいという申し出があり、旧委員会で話し合いの結果、新委員長を私が引き受けることになりました。矢原さんには、委員として引き続きお願いしています。新委員会の委員は、これまでの活動の継続性・若手への引継・日本全体の地域性を考慮して、若干交代して頂きました。現在の第一委員会の委員の構成は以下の通りです。（北海道）高橋、（東北）米倉、（関東）勝山、（中部）井上（委員長）、川窪、芹沢、（近畿）角野、藤井、（四国）小川、（九州）矢原、加藤、（沖縄）横田。

新絶滅危惧第一委員会は、春の分類学会大会時と秋の植物学会大会時に委員会を開催することを原則とし、既に昨年9月に第1回会議、3月に第2回会議を開催しました。

新委員会の当面の活動計画として、環境省版レッドリストの改訂版を計画中です。旧委員会が協力してまとめた環境庁版レッドリストは日本の絶滅危惧植物の全体像をまとめたという点で高く評価されるものですが、1) データが比較的古い情報によっているため現状がはっきりしない、2) リストの最初の段階で漏れたため評価の対象にならなかった種がある、3) 分類学のその後の研究で新しい分類群が見出された、4) 離島など前回の調査で調査が行き届かなかった地域がある、などの弱点が内包されています。本委員会ではこれらの弱点を多少とも克服するため、新レッドリストの作成に当たって、1) 環境庁版レッドデータブックのCR種の現状調査、2) 前回調査で漏れた500種程度の調査候補種の選定と調査、3) 前回調査で調査不十分な地域での調査、を計画しています。この仕事は環境省の仕事を委員会としてお手伝いするという形なので、環境省側から委員会への正式な依頼が来て初めて始まる仕事ですが、現在環境省と内容について話し合いを行っています。委員会に正式に依頼があれば、各県における調査に会員各位の協力をお願いすることもあると思いますので、よろしくお願いします。

委員会の活動の一環として、種の保存法による植物の種指定の環境省への斡旋も行っています。会員諸氏の身の回りの植物で種指定することにより、絶滅リスクが回避できる植物がありましたら、委員会の方にご連絡下さい。出来るだけ対応したいと思います。また、種指定でなくとも、絶滅危惧植物の自生地が開発行為などで失われる可能性が高い場合、委員会に連絡頂ければ、これも関係機関と協議を行うなど委員会として対応したいと思います。

また、IUCNへの対応や東アジアの近隣諸国への対応など国際対応が求められています。委員会としての力量は限られていますが、出来る範囲でなるべく対応して行きたいと考えています。

## 自然史学会連合報告

担当幹事 西田治文

2002年3月2日(土)に自然史学会連合委員会が開かれ、今年度の活動方針が決まりました。2001年度と同様、シンポジウムを秋に開催すること、地域博物館アクションプラン、自然史教育支援アクションプランを活動の中心とすることになります。詳細は連合ホームページをご参照ください。また、環境省がホームページ上で意見を公募していた「生物多様性国家戦略」の改定案に対して、連合としても下記のような意見を出しました。

### 生物多様性国家戦略の見直しについての意見書

自然史学会連合(代表:森脇和郎 総合研究大学院大学・教授)

連絡先:自然史学会連合事務局(国立科学博物館内)

[庶務・事務局担当] 篠原現人(国立科学博物館)

住所 〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1

Tel: 03-3364-2311

E-mail: s-gento@kahaku.go.jp

平成14年3月8日

環境大臣 大木 浩 殿

自然史学会連合  
代表 森脇 和郎

#### 生物多様性国家戦略の見直しについての意見書

「生物多様性国家戦略」は、日本の国土と自然環境を健全な状態で将来にわたって継承し、人類及びすべての生物が適切な環境下で可能な限り共存してゆくための条件を、地球規模の視野において整備する基幹となる指針であり、その策定に携わる関係諸機関のご努力に対し、自然史学会連合は敬意を表するとともに、最善の成果を期待するものであります。

生物多様性と地球環境は、人類の活動と不可分のものであり、そのすべてにとって持続可能な状態を維持するためには、人類の英知すべてを結集する必要があります。さらに、各個人が自然と人類の現状と将来像について正しく理解し、行動できなければなりません。そのために必要な個人の行動規範は、自然現象を幅広く理解し、正確な知識と理解に基づいた自主的なものでなければなりません。自然史学会連合は、そのような行動規範を各個人が形成するうえで、自然史科学が大きな役割を果たすと考えております。「生物多様性国家戦略」の見直しにあたって、また改訂後の実施段階においても、自然史科学の専門家集団として可能な限りの協力を続ける所存です。

現在の案は、多岐にわたって配慮されておりますが、上記のような視点から、以下の点についてより深い、あるいは実効ある表現が必要であると思われれます。

### 1. 効果的な教育システムの構築

生物多様性と地球環境についての理解とモラル形成は、すべての個人まで浸透しなければ効果がない。前文第一部第一節にあげられている「生物多様性の危機の構造」には触れられていないが、潜在的な危機構造として、生物と地球環境に対するモラル形成の不備、一部にはモラルの崩壊がみられる。この点を改善するためには、知識としての教育だけではなく、なぜ生物多様性が重要であるかを自然とのふれあいを通して体得する、「心に染みた」理解が必要である。自然史教育は、この点において効果が大きいといえる。

自然史教育を初等教育において行う試みは現在でもすすめられているが、基本的な指針や教育体系の整備は十分とはいえない。自然史教育の義務づけと内容指針、教員への新たな指導、地域博物館や研究施設などの整備と活用など、既存の教育体系をより効果的なものに整備する必要がある。この意味で、65 ページ(2)「学校教育における取組」に記述されている内容は、たとえば学校間、教員の能力、施設面などにおいてばらつきがあり、単なる「充実」という表現を超えて、より実効性のあるシステム下で実施される必要がある。

### 2. 生物多様性の歴史的理解

生物多様性の重要性を万民が理解するうえで、生物多様性が歴史をもち、地球環境と相互に関係しながら40億年の時を経て徐々に形成されてきたことを強調する必要がある。特に、日本の生物多様性は白亜紀以来維持されてきたアジア東岸の温暖湿潤な気候と多彩な地形に恵まれ、顕著な地域特性をもって形成されてきた。このような知識は、いったん多様性とそれを育む環境が失われれば、取り返しがつかないこと、それが日本のみならず人類の経済・文化にとっても大きな損失であることを理解し、生物多様性がなぜ維持されなければならないかという基本モラルを形成するために欠かせない。

### 3. 自然史情報の集積と資料の継続的管理

本文12 ページ2-(3)にふれられているように、生物多様性を維持し、その効果的な利用を図るためには、生物多様性情報を網羅し、科学的に解析しなければならない。生物多様性は、時間的空間的に変化する歴史的存在であるから、現在のみを基準にした情報の集積のみでは不十分である。基礎情報の充実は本文7 ページほか、随所に述べられているが、その情報は現状認識のみにとどまらず継続的でなければならない。また、情報のもととなる標本などの維持管理は永続的なものでなければならない。また、このような情報は自然史教育などにも効果的に生かせるように管理、利用される必要がある。この点について、58 ページ第4章第1節1に触れられている「生物多様性センター」の整備は評価できるが、上述のような生物多様性の地域特性や教育効果などを勘案すると、地域博物館、動植物園などの既存施設及び人員の機能的、質的維持に加えて、必要に応じた拡大充実、相互の連携が不可欠である。

### 4. 調査研究の拡大

生物多様性の保全と持続的利用を確実なものにするための「調査研究の促進」(61 ページ第2節)は、多くの分野を包含しているが、生物の住環境に大きく影響する土木関係が欠落している。また、「生物多様性国家戦略」は日本の経済活動とも切り離すことができない。さ

さまざまな施策を経済学的に評価することが求められよう。以上のような調査研究が横断的になされることで、「社会資本整備にあたっての配慮」(67ページ)が適切になされることになろう。

附：自然史学会連合は、自然史科学の発展と教育・啓蒙などの社会貢献を目標として設立された自然史系学協会の連合組織です。平成14年3月現在、以下の34学協会が加盟しております。

種生物学会、植物地理分類学会、地衣類研究会、地学団体研究会、東京地学協会、日本遺伝学会、日本衛生動物学会、日本貝類学会、日本花粉学会、日本魚類学会、日本菌学会、日本蜘蛛学会、日本古生物学会、日本昆虫学会、日本昆虫分類学会、(社)日本植物学会、日本植物分類学会、日本人類学会、日本生態学会、日本生物地理学会、日本蘚苔類学会、日本藻類学会、日本第四紀学会、日本地質学会、日本鳥学会、日本地理学会、(社)日本動物学会、日本動物行動学会、日本動物分類学会、日本プランクトン学会、日本ベントス学会、日本哺乳類学会、日本鱗翅学会、日本霊長類学会

## 第18期日本学術会議古生物学研究連絡委員会第5回報告

自然史学会連合担当委員 西田治文

日本学術会議 第5部会議室において、2002年3月4日(月)13:30～17:00第五回研究連絡委員会が開催されました。植物分類学会に関連する事項について報告します。

### 学術会議報告

2月14日の連合部会において審議された、「日本学術会議の在り方」についての内容が紹介された。学術会議の中で現在議論されている、「科学者コミュニティ」案が示され、学術会議全体で今後大きな組織の見直しが行われる可能性のあることが報告された。

研連の再編も平行して立案段階にあり、2月14・15日に第4部会で審議が行われ、第4部研連の見直しが行われた。新しい案では従来の研連から計57名が削減され、新研連が7つ置かれる。古生物学研連は定員1名減となり存続する。また地質学総合研連は、その下に環境地質学(または応用地質学)、第四紀学の2つの専門委員会を置く案である。これらの案は3月の第四部会、4月の総会を経て決定される。ただ、学術会議全体の变革が行われると、研連自体がどのように扱われるか未知数である。

### 審議事項

#### 1. 科研費配分委員候補者の推薦

細目「層位・古生物学」の第一段審査委員候補者に関し、日本古生物学会に6名、日本地質学会に2名、第四紀学会に2名の推薦依頼を出すことになった。古生物研連には本学会と日本動物分類学会から各1名の委員が参加しているが、細目の内容と研連の目的に沿うかたちで、委員候補者の推薦学会とはならず、選考の審議にのみ加わることを了承した。

## 2. 古生物タイプ標本の保全・データベース化

昨年出版された古生物タイプ標本データベース(第1巻)のオンライン公開に関し、実質的な管理を行う日本古生物学会の承認を得た後、出版の1年後をめどに行う予定が示された。また、現在第2巻は編集最終段階を迎え、刷り上がり計586ページ、印刷費見積もりは250万円で、文部科学省出版助成を申請している。第2巻には植物大型化石約1300件、花粉孢子化石約400件が収録される。第3巻は未収録分および未選出分類群からなり、10月に原稿締め切りの予定。

データベース完成後の利用と展開については研連内で議論を続けると共に、積極的に宣伝を行う。

## 3. 博物館学芸員の科研費申請資格

古生物学会会員名簿(1999年版)に基づく科研費申請資格が認められていない全国の博物館在籍研究者の一覧が示された。これによると、48博物館に総数78名の研究者が在籍する。現在改定中の名簿が出版され次第、新しいデータに基づいた調査を行い、申請資格取得について文科省に対する働きかけを進めることが議論された。この問題については自然史学会連合とも連携して情報の収集と働きかけを進める。

## 4. その他

博物館や大学に保管されている研究資料(古生物標本)の保全・管理の問題、大学の古生物研究者の減少などに関し、議論が行われ、さらに継続して議論を行うこととした。

# 学会からのお知らせ

---

---

## 会費納入のお願いと自動振替利用のお知らせ

---

会計幹事 高野温子

2002年に入ってはや5ヶ月が過ぎようとしています。本学会の会費は前納制で一般会員5,000円、学生会員3,000円、団体会員8,000円です。納入状況はニュースレター送付の際の宛名書きの右下に「納済会費：数字」という形で示してあります。この数字が2002未満の方は、お早めに納入いただきますようよろしくお願い致します。2002年度から自動振替制度をご利用の方は、数字の代わりに「自動振替」と記入されています。

ご承知のように今年度より会費納入に自動振替をご利用頂けるようになっております。会計事務削減のため、なるべく本制度をご利用頂きますようよろしくお願い致します。ご希望の方は、昨年11月にお送りした自動振替依頼書にご記入・ご捺印の上、会計幹事にお送り下さい(2002年度の会費引き落としは終了しておりますので、ご利用は2003年度からになります。依頼書をご希望の方は会計幹事までお問い合わせ下さい。会計幹事の連絡先は、ニュースレター巻末にあります)。

## 平成14(2002)年度野外研修会のお知らせ

宮崎市 南谷忠志

### キバナノツキヌキホトトギス咲く 秋の日向路を散策

宮崎県は、島嶼や特殊地形等があるわけではないが固有種は多い方です。また、陸の孤島であったため、開発が遅れ、多様な自然が残されてきました。しかし、近年になって開発の波が押し寄せています。今回は、その一端をご案内いたします。県中部で、固有種のキバナノツキヌキホトトギス・キバナノホトトギス(ちょうど花期)やウラジロミツバツツジを、県北部で、現在農地整備・造成中の、オグラコウホネ・ヒメコウホネが群生し、ミクリ類や南限のチョウジソウ・ヌマゼリ等20種ほどのRD植物が生育する低層湿原を観察します。また、豊富な水田植物と九州唯一の周伊勢湾要素のナガバノイシモチソウやヘビノボラスが生える中間湿原も見てください。交通不便な辺境の地ですが、ふるってご参加いただき、植物学会後のひとときを花ウォッチングでお過ごし下さい。

期日と日程：9月27日(金)～29日(日)

27日：夕方集合。室内研修(九州～宮崎のフロラ：南谷)と懇親会。

28日：県中部の尾鈴山山麓や川南湿原、水田等での野外研修。夕方は宿で室内研修(北川町家田湿原の植物とその保護：矢原徹一氏予定)と懇親会。

29日：北川町家田湿原での野外研修の後、午後3時頃に宮崎駅と空港で解散。

\*移動は2日間とも貸し切りバスを使用。

集合場所および宿泊先

宮崎市「宮崎第一ホテル」(Tel: 0985-23-1111)に、27日午後5時までに集合。

28日の宿は日向市「日向ハイツ」(Tel: 0982-53-0666)。

参加費：27,000円(2泊各3食付。懇親会、貸切バス代を含む。参加人数により、多少変更される可能性があります。)

案内：南谷忠志(宮崎植物研究会会員も予定しています。)

募集人員：先着30名。

申込先(郵便かファックスでお願いします。):

〒880-0913 宮崎市恒久5-4-7 南谷忠志

Tel & Fax: 0985-54-3879

申し込みの締め切りは、7月10日(必着)です。

申し込みの際は、下記事項をお知らせ下さい。

氏名、連絡先住所と電話番号、宮崎までの交通手段(飛行機、高速バス、JR、自家用車など)

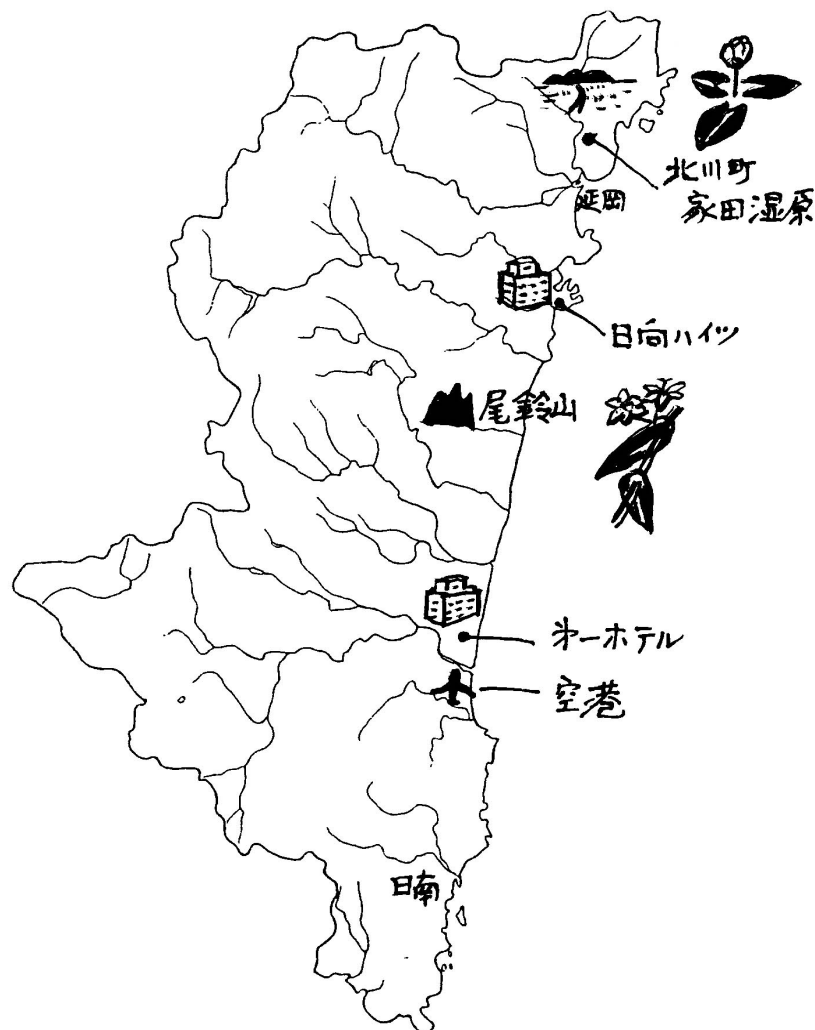


## 交通：

1. 宮崎空港より：バスで約30分（宮交シティーバスセンターで「宮崎神宮」行きに乗り換え、バス停「橋通り5丁目」で下車）。または、JRで約15分（宮崎駅まで）、宮崎駅から車で5分または徒歩で15分。
2. 高速バス：宮交シティーバスセンター下車。あとは、1のバスに同じ。
3. JR：宮崎駅下車。あとは、1のJRに同じ。
4. 自家用車：宮崎インターから車で約15分。

## 注意事項

- ・申し込まれた方には、追って案内を差し上げます。
- ・採集が不可能な植物もあります。案内人の指示に従ってください。
- ・野外研修時も自家用車を使用したいという方は、その旨を申し込み時に明記してください。現場は道が狭く、危険な箇所もあります。できるだけ貸切バスをご利用下さい。



野外研修会の行き先予定地マップ

## 日本植物分類学会次期（2003、2004年度）会長ならびに評議員選挙のお知らせ

庶務幹事 梶田忠

日本植物分類学会会則12条および役員等の選出についての細則により、次期会長ならびに評議員選挙を行います。選挙管理委員長は菅原敬氏（東京都立大学）です。ニューズレター8月号と共に投票用紙と返送用封筒をお送りしますので、投票をお願いします。投票締切は2002年9月30日（月）（必着）です。開票は2002年10月5日（土）午後1時より、東京都立大学牧野標本館で行います。開票結果はホームページならびにニューズレター11月号でお知らせします。

## 書籍の割引のお知らせ

ニューズレター編集幹事 西田佐知子

「琉球弧の成立と生物の渡来」（木村政昭編著）という書籍が、出版元である沖縄タイムス社のご厚意で、会員に対して特別割引で販売されることとなりました。

この本は、沖縄地学会が主催して2001年2月に行われたシンポジウム「琉球弧の成立と生物の渡来」の成果の一部をもとに構成されたもので、琉球弧の地史と、イリオモテヤマネコなど多彩な遺存種・固有種の渡来ルートを追求した論集となっています。

特別価格：6,888円（税込価格の2割引。定価は8200円＋税。）

\*支払いは、代金引換制です。したがって、冊子小包郵送料450円＋代金引換料金250円（計700円）が送料となります。

申込方法：申し込みは、ファックスのみで受け付けます。ファックスには、下記の内容と「日本植物分類学会の会員であり、特別割引で購入したい」という旨を必ず明記してください。\*会員であることを書いていない場合は、定価料金をお支払いいただくことになってしまいます。

- 1) 部数、2) お名前、3) 連絡先の住所、電話、ファックス、Eメール、
- 4) お届け先の住所、電話、ファックス（連絡先と違う場合のみ）

申込先および連絡先

〒900-8678

那覇市おもろまち1-3-31

沖縄タイムス社出版部

Tel: 098-860-3591 Fax: 098-860-3830

E-mail: editor@okinawatimes.co.jp

## 日本植物分類学会 第1回大会を終えて

国立科学博物館 土居祥兌

本大会は、2002年3月15日から17日まで、新宿区百人町の国立科学博物館分館で開催された。因みに本大会は、学会統合による新学会の第1回大会とあって、参加者数の予測が難しい大会でもあった。大会会場の科博分館研修研究館4階の講堂(大会議室)は、臨時の椅子を持ち込んでも200名収容が限度で、参加者がそれより多い場合は会場後方に立って貰わなければならない事態が起こることも予想されたが、仮に大会全参加者が250名だと総会に出席する会員は多分200名程度であろうと予測し、この講堂を会場として使用することに決めた。現実には、大会参加者は222名で、少々狭い感じであったが、何とか講演・総会共に無事に行うことができた。

今回の大会では、3月15日のシンポジウム「ヒマラヤの植物と菌類の分類学的研究に関する最近の動向」の参加者が予想以上に多く、準備委員会の一同はほっとした。しかし、出席者からの質問は思ったより少なく、各演者の講演内容について事前の協議・調整が必要だったかも知れないと反省している。

16・17日の一般講演は25件で、話題になる講演も多く、数件の講演では会場はほぼ満席で、後部で立って聴講する方々が見受けられた。参加者には、学生・若手研究者、さらにアマチュア研究者が旧学会の大会の場合に比べて多かったよだとの印象を数名の参加者からお聞きした。

ポスターセッションの申し込みは32件で、ポスターを貼るスペースは確保したものの、閲覧者用のスペースはかなり狭かったよだ。大勢の参加者が一斉にポスターを見る時間帯を配慮した、ゆったりしたスペースが必要で、この点皆さんに大変ご迷惑をおかけし、申し訳なかったと思う。

ところで、準備委員会一同が最も気にしたのは、懇親会の参加費が例年の大会に比べて割高だったことで、参加者が少ないのでは、と悲観的な予測をしていた。ところが、参加者100人での予約に対し、121名の参加があった。会場のホテルの、予想外のサービスで食べ物・飲み物共に十分で、豪華な雰囲気の中で大いに盛り上がった。

総会の内容については、学会本部から報告があると思うので、ここでは省略したい。

本大会では、3月16日午後1時半から、本年度から設けられた日本植物分類学会賞の受賞者、大橋広好・堀井雄治郎両氏の受賞講演が行われた。この受賞講演の時の会場はほぼ満席であった。

今回の大会では、当日申し込み・参加の会員が一般会員62名、学生会員12名と予想外に多かった。これら当日参加者からの参加費のお陰で、本大会の決算は黒字であったが、大会を準備する側としては、早めに参加申し込みをしてもらえたら有り難い、と痛感した。なお、今回の大会時には、エクスカージョンは企画しなかった。

最後に、今回の大会の準備に際し、シンポジウムを共催して下さったヒマラヤ植物研

究会、そして適切なご助言をいただいた加藤学会会長および学会本部、旧日本植物分類学会昨年度第31回大会準備委員長の岐阜大学の高橋弘さん、その他多くの方々の協力に対し、心からお礼申し上げます。また、研究発表要旨集などの印刷物の不手際等、至らなかったところが多々ありましたことをお詫び申し上げます。

## 大会運営についての意見

---

京都大学大学院理学研究科植物学教室 村上哲明

3月15日から17日に開かれた(新)日本植物分類学会第1回大会に私も参加させていただいた。大会事務局の方から230名以上もの参加者があったことが報告され、若手による参加、発表も目立った。加藤雅啓会長が懇親会の挨拶でも述べられたように、日本の植物分類学の未来は明るいと私も感じた次第である。無事に第1回大会を運営し終えられた国立科学博物館の皆さんにも感謝したいと思う。

さて、今回の大会の運営方法については、基本的に(旧)日本植物分類学会(以後、旧学会と呼ぶ)の近年の大会のやり方を踏襲されていたと思う。しかし、私には、いくつか問題点があるように感じられた。ちょうど、新しい学会が立ち上がった時期であり、大会の運営方法についても検討してみる良い機会だと思う。私の私見を述べたい。

まず、座長についてであるが、第1回大会でも旧学会の最近のやり方に従って、講演をした人が次の講演の座長をするという形式で一般講演が行われていた。日本生態学会などでもこの方式がとられているようである。大会を運営する側から見れば、いちいち座長の依頼をしなくて済むし、関連する発表が近くに集まるようにプログラムを組む必要もなくなって、労力がかなり軽減されるだろう。

しかし、自分の発表終わるやいなや座長席に行って次の人の紹介をするというのではあわただしいし、時間的にもロスが出てしまう。昔ながらの大会のやり方通り、ちゃんと座長を据えて一般講演をする方が時間的にも効率的であるように思った。また、座長は、適切な質疑を会場から誘導する大切な役割も担っている。質疑が活発に行われない大会では魅力に欠けてしまう。会場から質問が出ないときには、座長が責任をもって1つ、2つ質問することも重要である。それによって、会場からの質問も誘発されることが多いからである。たまたま発表の順番が次の人の座長をさせられても、そのような役割をすることは難しい。植物分類学会は、生態学会などと違って、たった1会場のみの大会である。座長を依頼したとしても、大した人数ではないように思う。関連するような発表が集まるように分類・整理して大会プログラムを作成し、適切な座長を選定、依頼して一般講演を行っていただきたいと私は思う。

また、旧学会では、1人のもち時間が40分もあった時代があった。これはいくら何でも長すぎたと私も思っているが、もち時間が20分の時代もしばらくあったと記憶してい

る。旧学会では、いつの間にか植物学会などと同様、1人のもち時間が15分（発表12分、質疑3分）になってしまっていた。植物学会のように多会場でしかも多数の講演がある場合には私もやむを得ないと思うが、植物分類学会程度の大会規模なら1人20分（発表15分、質疑5分）くらいのもち時間を維持することはできないのだろうか。今回も一般講演の始まりは9時半で、開始をもう30分くらい早くすることは可能なような気がする。私は発表時間を長くしてくれと言いたいのではなく、もう少しじっくり質疑をする時間を確保して欲しいのである。「時間となりましたので、質問の時間は割愛して次の講演に移らせていただきます。」というのが続いたのでは、大会の魅力が半減してしまうと思うからである。ちゃんと座長をおいて欲しいというのも、同じ理由である。

大会は雑誌と並んで学会の存在意義に直接関わる非常に重要なものである。植物分類地理学会と旧日本植物分類学会が統合して新学会として再出発したこの時期に大会運営方法についてもじっくり検討していただければ幸いである。

#### 庶務幹事より

大会運営に関してご意見等がありましたら、庶務幹事 (e-mail: tkaji@bg.s.u-tokyo.ac.jp) までご連絡下さいますようお願いいたします。村上さん以外からもすでに様々なご意見を頂戴しており、次期大会に向けて運営方法等を再検討いたします。

## 「日本地衣学会 (The Japanese Society for Lichenology)」 設立のお知らせ

高知大学理学部 岡本達哉・千葉県立中央博物館 原田浩

2002年2月17日、念願であった「日本地衣学会」がついに発足しました。これについて本会会員の皆様にご紹介します。

### 設立の経緯

地衣類を材料とした研究は、従来日本では分類や化学成分に限られていた。しかし最近では培養をはじめとするバイオテクノロジーやヘルスケア材料、環境科学、教育材料などの分野に広がり、研究者も大学や公共機関、民間企業へと広がって数も増加してきた。特にバイオテクノロジー分野では世界をリードするまでに至っている。しかし、国内において地衣類を主題とする学会やその専門誌が無いことから、他分野に比べて学術活動の活性化の面で立ち遅れていた。このため分野間の交流も弱く、また、専門学会が

無いことは特に若手研究者にとって明らかに不利であった。同様に、研究を指向するアマチュアの立場でも、地衣類自体や地衣学を身近に学習する機会が与えられていなかった。この現状を打破するため、地衣類を専門とする総合学会の設立を願う有志一同は昨年9月に日本地衣学会設立準備会を組織し、集会を重ね学会設立に向けて議論を深めていった。

### 学会設立総会

2月17日、高知学園短期大学(高知市)において設立総会を開催するに至った。総会時点で76の個人・団体が入会し、このうち総会への出席者数は委任状36名を含む51名であった。総会では会則、役員、事業計画、予算、学会誌について審議承認し、正式に「日本地衣学会」設立を宣言した。総会に引き続いて行なわれた、吉村 庸初代会長による記念講演「地衣類研究小史」では、日本の地衣類研究者の系譜などについて興味深い話題が提供された。当夜は市内で懇親の場を持ち、学会設立を祝った。

### 今後の予定

現在学会では次のような事業を計画している。このほか、地域ごとの活動も模索中である。また、必要であれば他の学会・団体と積極的に協力関係をとることも視野に入れており、地衣類に関する相談等があれば、事務局宛にお送りいただきたい。

- 1) 日本地衣学会第1回大会・国際シンポジウム(神戸薬科大、7/27-28)
- 2) 学会誌「Lichenology」1巻発行(1号6月下旬、2号11月下旬)
- 3) ニュースレター「日本地衣学会ニュースレター」発行(6月、11月、他随時)
- 4) 第1回観察会(中部地方、秋)
- 5) ホームページ(<http://www.kulawanka.ne.jp/~yozyamam/jsl.htm>)

### 事務局等

会長：吉村 庸。庶務幹事：山本好和。会計幹事：小峰正史。編集委員長：原田 浩(E-mail: [h.hrd3@mc.pref.chiba.jp](mailto:h.hrd3@mc.pref.chiba.jp))。

事務局：〒010-0195 秋田市下新城中野

秋田県立大学生物資源科学部次世代生物生産システム学講座、

TEL 018-872-1646、FAX 018-872-1678

E-mail: [yyamamoto@akita-pu.ac.jp](mailto:yyamamoto@akita-pu.ac.jp)

入会等は：電子メールあるいは郵便で事務局まで。

## 平成14年度自然史セミナー「菌類の多様性と分類(前期)」 のご案内

菌学教育研究会 布村公一

国立科学博物館と菌学教育研究会の共催により、自然史セミナー 菌類の多様性と分類3日間コースを下記のように開催いたします。午前中の講義では菌類の分類群を解説し、午後の実習では主として顕微鏡観察を行います。

平成14年度前期講座日程(時間:10:00~16:00)

6月5日(水) クロサイワイタケ(マメザヤタケ)目及び関連菌群の分類

独立行政法人 森林総合研究所 阿部恭久

6月6日(木) クワイカビ目および関連菌群の分類

独立行政法人 森林総合研究所東北支所(非常勤) 升屋勇人

6月7日(金)

午前:北海道札幌近郊のキノコとNPO法人北方菌類フォーラムの活動の紹介

NPO法人北方菌類フォーラム代表 竹橋誠司

午後:菌類同好会会員の集い

進行係:菌学教育研究会 布村公一

国立科学博物館植物研究部 土居祥兌

場所:国立科学博物館分館 研究研修館2・4階

(新宿区百人町3-23-1 Tel 03-3364-2311)

募集人員:(菌類関連実務担当者または大学生以上の方)1講座20名

(ただし7日は講義だけのため100名)

参加費:1日につき 一般2,000円 学生1,500円

申込方法:(興味ある日のみ申込可)次の事項を往復はがきに書いて申込先に

平成14年5月25日(消印有効)までに申し込む\*。

往復はがきに書く事項:1)出席したい日、2)氏名、3)住所、4)連絡先電話番号、5)勤務先または大学名、6)返信の表書き

申込先:〒187-0032 東京都小平市小川町2丁目1299-49

菌学教育研究会事務局 布村公一

Tel 042-343-6836 E-mail:BZG22155@nifty.com

問合せ先:国立科学博物館企画課(Tel 03-5814-9875)

国立科学博物館植物研究部

〒305-0005 つくば市天久保4-1-1

土居祥兌(Tel 0298-53-8973 E-mail:y-doi@kahaku.go.jp)

\* (ニュースレター編集幹事より)締め切りが5月25日となっておりますが、ニュースレターの発行の都合にあわせて、当学会員に限り、締め切りを変更して下さることになりました。締め切りは、6月1日(土)(消印有効)です。また、それ以降や、締め切りまでに定員を越えている場合でも、電話などで先に問い合わせてくだされば、できるだけ参加できるよう融通して下さるそうです。この機会にぜひご参加ください!

## 鹿児島大学農学部植物標本室 (KAG) について

西南日本植物情報研究所、鹿児島県立短期大学 堀田満

昨年、鹿児島大学の植物関係標本の管理システムが変わりました。知らない方もあろうかと思い、現状をお知らせします。

<過去> 鹿児島大学農学部植物標本室に所蔵されていた標本は初島住彦博士の九州南部から南西諸島の植物相の研究での基礎資料となり、多くの基準標本を含んでいます。しかし、生涯にわたって標本の収集管理を行ってこられた迫静夫先生が1989年にお亡くなりになって以来、その利用が大変不便な状況下におちいり、研究上多くの問題が起きていました。

<現状> 昨年4月に鹿児島大学に、日本の大学博物館としては7番目の総合研究博物館が創設され、農学部植物標本室は新設された博物館にその管理が移管されました。標本室も農学部の好意で、農学部内により広い部屋が確保され、標本の移転も完了しています。しかし10年以上にわたって標本管理がほぼ放棄されていたので、虫害がひどく、昨年夏以来、定年退職で少し暇が出来たことを幸いにして、その整理と虫害の防除を進めています。キク科・ツツジ科・タデ科のように虫に食われやすいグループは相当ひどい状況下にあります。標本はなるべく廃棄せずに処理する方針で作業は進められています。現在ほぼ2/3の処理が完了したので、この夏までには少し利用もしやすくなるでしょう。

<内容> 「鹿児島大学総合研究博物館植物標本室」(農学部)には鹿児島高等農林専門学校設立以来収集されてきた約14万点の植物標本が所蔵されています。1910年代の初めから1980年代までの、2回の世界大戦を挟んだ70年の期間にわたり、関係者が収集に努力を傾けた貴重なコレクションです。九州から南西諸島地域から収集された標本がこのコレクションの中核になっていますが、*Hydrangea kawagoeana* や *Polygonum kawagoeanum* にその名前が残されている河越重紀博士(高等農林専門学校林学科初代教授)の採集に関わる大量の北アメリカ大陸産植物標本や交換によって取得した東南アジアや台湾、あるいはヒマラヤ産植物の標本も多く、学術的に貴重なコレクションになっています。

<近い将来> また現在は初島博士が所蔵されている約2万点の標本や鹿児島大学理学部にある約2万点の鹿児島県下標本(主に1990年以降の収集)も博物館に移管される予定です。その大部分は未整理の状態にあります。

<利用連絡> なんとか利用できる状況になったので、少し遠いのですが、南西諸島や屋久島の調査の途中に立ち寄り、利用されるとよいと思います。標本閲覧の申し出は、博



物館の植物分野関係者(落合雪野/福永しげ子さん)に連絡してください。まだ博物館では標本の管理・利用規程を作成されていないので、利用について問題がないわけではありませんが、利用は出来る状況にあります(規則は近い内に整備される予定です)。

連絡先は:鹿児島大学総合研究博物館 890-8580 鹿児島市郡元一丁目 21-24

Te1. & Fax 099-285-8141 です。

< 註記 > 筆者の連絡先は :

堀田 満 (西南日本植物情報研究所) 890-0081 鹿児島市唐湊四丁目 6-18

Te1. & Fax 099-812-2005 e-mail Mitsuru.Hotta@mb9.seikyou.ne.jp

(鹿児島県立短期大学) 890-0005 鹿児島市下伊敷 1-52-1

Tel. 099-220-1111 (代表) 220-0092 (学長室) Fax 220-1115 です。

## 大阪市立自然史博物館植物標本庫 (OSA) について

大阪市立自然史博物館 藤井伸二

2002年1月末に、新収蔵庫への全面移転を行いました。新しい植物標本庫は、自然史博物館本館(旧館)の西端に隣接した「花と緑と自然の情報センター」(新館:植物園との共同施設)の地下1階部分です。3月より以前と同様の閲覧が可能となりました。面積が倍増した新標本庫の自慢をかねて紹介させていただきます。

OSAは地方の中規模標本庫のため、利用者が少ないのが大きな悩みです。しかし、私の前任者の瀬戸剛氏がその整備に半生を注いでいるだけに、充実度は地方博物館のなかでも一級品だと自負しています。研究者のみなさんに、もっと活用していただければ幸いです。また、アマチュアの方々の利用も歓迎します(事前にしっかり synonym をリストしてから御来館下さい。でないと目当ての標本にたどりつけません。また、標本閲覧の経験がない方にはガイダンスをしますので、日程調整が厳しくなることをあらかじめご承知ください)。利用については、藤井伸二 (shinji@mus-nh.city.osaka.jp) または下記スタッフまで。

設立:1950年

標本点数:約28万点

スタッフ:那須孝悌(館長,第四紀花粉),岡本素治(ブナ科),藤井伸二(ブナ科),佐久間大輔(菌類)

収集分類群:維管束植物(さく葉,液浸,材,材プレパラート,果実・種子),コケ,海藻(さく葉),菌類(地衣類,変形菌を含む)

収蔵面積：植物部分は約320平方メートル(2層化、特別収蔵庫の一部)。特別収蔵庫は、688平方メートルの部屋を2層化し、植物・昆虫・動物標本を収蔵している。

空調：気温20℃、湿度50%に設定。間接空調方式による24時間運転。冬季の設定温度を低く(16～18℃)にしたかったが、同室を共有する昆虫分野の要望により一年を通して20℃の設定とした。

消火設備：窒素ガス方式

防虫剤：ナフタリン

燻蒸：標本受け入れ時に必要が認められるものについて燻蒸を実施。標本庫内の燻蒸は行っていない。現在、二硫化炭素による燻蒸を冷凍燻蒸(-40℃)に移行中。燻蒸は標本受け入れ時に必要に応じて行っているのみだが、今のところ標本庫内での虫害問題は発生していない。

さく葉標本の収納：固定式ロッカー。維管束植物はエングラースystemに従う。藻類は、緑藻・褐藻・紅藻のそれぞれについてアルファベット順。

最近の交換先：AD, HYO, MAK, MBK, OOM, TNS, 頌栄短期大学, 琵琶湖博物館  
主なコレクション(点数, 「関連出版物等」)

- ・山本虎夫海藻コレクション(13,000点, 「日本産海藻標本目録緑藻・褐藻編, 紅藻編1, 紅藻編2」)
- ・児玉務苔類コレクション(23,000点, 多くのタイプ標本を含む, 「近畿地方の苔類第1部・第2部」)
- ・中島徳一郎蘚類コレクション(30,000点)
- ・真砂久哉和歌山県シダ植物コレクション(10,000点, 「真砂久哉氏収集和歌山県産シダ植物標本目録」)
- ・瀬戸剛維管束植物コレクション(50,000点, OSAの骨格をなす重要なコレクション, 「近畿地方シダ植物目録1・2」(紀要掲載論文))
- ・三木茂水草コレクション(3,600点, 多くのタイプ標本を含む, 「三木茂博士寄贈水草さく葉標本」)
- ・桑島正二大阪府維管束植物コレクション(「大阪府植物目録」)
- ・梅原徹維管束植物コレクション(10,000点, 湿生植物が充実)
- ・アデレード標本庫交換維管束植物(1,000点, オーストラリア産植物)
- ・布藤昌一維管束植物コレクション(50,000点, 整理中)
- ・畔田翠山標本帖(江戸時代の標本帖, 「立山に奇草を求めて - 富山藩薬品会を通して - 」)
- ・粉川昭平果実・種子コレクション(5,000点, 整理中)
- ・布谷知夫木材プレパレートコレクション(1,200点)

コレクション・メモ

大阪を中心とした近畿地方産植物を重点的に収集。近畿地方のフロラに関する標本資

料としては、京都大学総合博物館（旧理学部植物標本庫）について重要（と自負している）。とくに瀬戸剛氏が精力を注いだシダ植物のコレクションが大きな特色。また、蘚類・苔類・藻類の標本も充実。三木茂水草コレクションと児玉務苔類コレクションは多くのタイプを含み、当標本庫の至宝的存在。一方、畔田翠山標本帖は、現存する江戸時代の数少ない植物標本であり、科学史的にきわめて重要。

### 移転の明と暗？

旧標本庫は、標本戸棚が満杯で新規の配架が困難な状況でした。今回の全面移転における大きな目的は、1) 新規スペースを確保して新たなさく葉標本の配架を可能にすること、2) これまで建物内のあちこちに分散保管（放置？）されていた大形の材幹標本の一元保管、3) 満杯になっていた種子・果実標本の保管スペース確保、4) 菌類担当者の配置によって増大した菌類標本の保管スペース確保、の4点でした。移転によってこれらの問題は解消され、あとは各担当者の努力次第というところです。

私の担当するさく葉標本については、2月中旬から4ヶ月ぶりに整理・配架作業を再開しました。そのなかで、今回の移転において失敗がいくつかあるのに気がつきました。ちょっと恥ずかしいのですが、みなさんが私どもの轍を踏まぬよう、それらの失敗について紹介させていただきます。

- 1) 照明が暗い：蛍光灯の密度が以前の半分近くに減ったため、かなり暗い部分がありました。これは、2層の下段で顕著で、標本の配架作業にはちょっとつらいものがあります。従来は照度が保たれると思いきや（本当は照度のことは何も考えていなかったのですが）、設計を確認しなかったのが原因かもしれません。ただし、2層の上段では、同様の照明灯密度で充分明るく感じるのので、天井高や天井の色にも多分に影響されていると思います。これは、何とか改善したいと思っています。
- 2) 標本戸棚の上部に手が届かない：旧標本庫では標本戸棚を床上にそのまま設置していたのですが、新標本庫では高さ15cmの台上に設置しました。この結果、標本戸棚内の最上段が、背伸びをしないと届かなくなりました。この状況を想定できなかったのは痛恨です。
- 3) 棚床の編目：2層式にした床（厳密には棚）の網目が大きく、上層で鉛筆等を落とすと床を通過して下層に落ちてしまいます。ほぼ同時期に完成した京都大学総合博物館や少し遅れて完成した北九州市立自然史・歴史博物館（仮称）の床は網目がずっと細かいので、ちょっと悔しい。でも、法規上は床じゃなくて棚なんです（念のため）。現在は、段ボールをおいて床状にしてあります。
- 4) 超重量扉：収蔵庫入り口の扉が厚くてたいへん重く、片手では開かないのが難点です。標本片手に気軽に出入りすることができません。いちいち扉の前で標本を横に置き、「よいしょ」と開けます。窒素消化や空調とも関係するのですが、「なにもここまで扱いにくい重量扉にしなくても・・・」というのが本音。

## 連絡員から春便り

### 亜熱帯の島便り・2・

琉球大学・理・海洋自然科学科 傳田哲郎

「何かんだ?」「イ、ル、カ、ン、ダ」

雪解けの開放感とまではいかないが、亜熱帯の島にも春の訪れを鮮烈に感じる季節がある。“うりずん”である。“うりずん”とは、潤うという意の“うり”と、浸み通るといふ意の“ずみ”が複合した語で、旧暦3月頃にあたる。この時期、沖縄島北部に広がる山原(やんばる)の林では、木々が一斉に芽吹き始める。イタジイの明るい黄緑色にタブノキの赤い新芽が彩りを添え、普段は濃い緑に沈む山原の山が鮮やかに色づく。

“うりずん”の頃は、人間社会も新人を迎える準備で忙しい。大学では入学式。県内外から多くの新入生が期待に胸を膨らませて集まってくる。“ないちゃー”(本土の人)ならば“桜の花に迎えられて”と言いたいところだが、沖縄のカンヒザクラはとっくに散っている。新入生を迎える花を敢えて挙げればデイゴだろうか。インド原産で沖縄県の県花にもなっているデイゴは、4月頃から赤紅色の花をつけ始める。さらに、今年は奇妙な花が新入生を出迎えた。イルカンダ(ウジルカンダ)である(写真1)。日本では奄美や沖縄などに分布するマメ科の大型藤本で、個々の花は約5cm、花序の長さは30cm程度になる。私が沖縄に来て6年間、大学構内ではイルカンダの花を見たことがなかった。しかし、昨年の崖崩れで周辺が明るくなったせいか、今年は道路脇に生育する一部の個体が実に多くの花をつけた。大きな花と花序にも目を奪われるが、その臭気もまた格別である。風が止



写真1 イルカンダの花序

むと、花をつけた株の周囲は異様な臭いに包まれる。実際に見たことはないが、イルカ  
ンダの花粉はオオコウモリによって媒介されると言われている。花の奥には大量の蜜が  
隠されており、少し花を開いてやると滴り落ちるほどである。オオコウモリはこの蜜を  
目当てに来るのだろうか。それにしてもあの悪臭は何のためにあるのだろうか。何かと興  
味のつきない植物である。

研究室の学生達とイルカンダを見ていると、新入生とその御父兄が後ろを通り過ぎ  
てゆく。何人かが足を止め、「何してはるんですか」と興味津々にのぞき込んでくる(ど  
ういう訳か関西の人ばかり)。あれこれ説明をすると、「何かんだ? いるかんだ? いやー、  
アパート探しに来たのに、ええもん見たわあ」と感動することしきりである。イルカ  
ンダの花と臭気に彩られ、彼らの入学式がより印象深いものになったことを祈っている。さ  
て、このニュースレターがでる頃は“うりずん”を過ぎて“若夏”の季節。“若夏”とい  
う言葉からは、本格的な夏を迎える前の生き活きとした自然の躍動感が伝わってくる。山  
でイジュの花(写真2)が咲き始めると、長く暑い亜熱帯の夏は目の前である。



写真2 イジュの花

## シダ便り・2・

熊本大学 高宮正之

### シダとの馴れ初めと研究のよろこび

今年の春は早い。あっという間にシダの芽出しの季節となりました。‘シダの採集と培養(行方沼東著)’からの引用です。「・・・シダは、毎年春の終わりから夏の初めにかけて、その年の新しい芽を出すのであるが、その芽出しの形の多様性は、驚くばかりである。冬の間、落ち葉をかぶって、厚い毛皮のような鱗片や鱗毛で覆われ、寒さから守られていた芽は、外気の暖かくなると共に日1日とその鱗片をぬぎ始めて、巻曲した頭を地上にもたげ出す、毎日いくらかずつ変わってゆく芽出しの形の面白さは、新しい鱗片の色や光沢と共に、毎夕見て回っても飽きることはない。・・・中略・・・晩春のシダの庭は、シダを培養する人たちにとって最も興味深い愉しみの時期である。毎朝毎朝、若萌えのシダたちを、いちいちのぞいて回り、時のたつのを忘れてしまう。・・・」さて、季節労働者の私の研究室では、これからがシダの減数分裂の真っ盛りです。あっちの葉こっちの葉を裏返し、孢子嚢の成熟具合を見ながら毎日毎日固定していきます。時のたつのを忘れてしまう暇がありません。なんと無粋なことか。この原稿が皆様に届く頃は、オシダ属やイノデ属の減数分裂は終了し、ノコギリシダ属やカナワラビ属の季節が始まります。今年こそ狙った株の減数分裂が捕まりますよう...

本題にもどりますが、今回は、“シダ植物研究のきっかけとなった大切な本あるいは論文”と、“シダ植物研究の魅力”について皆様のアンケート結果を整理します。第一報を書いてから、さらにお一人から回答を頂戴したので、21名からの答えです。一人で多数挙げてもらっているので、回答は重複しています。

### シダ植物研究のきっかけとなった大切な本あるいは論文

前回の指導教官に勧められてこの道に入られた10名のうち2名は、「きっかけはシダという植物ではなく、シダをやっておられる先生とたまたま接したという出来事」なので、特にこれといった大切な本はないそうです。

第1位・田川基二‘原色日本羊歯植物図鑑’(7名)「細かい字で書いてある注のところまで全部暗唱できるくらい、初めから最後まで何度も読んだ。日本産シダ植物の分類学的問題点(これから調べるべきところ)が逐一書いてあって、おもしろかった」すべてのシダ植物が本物そっくりの形と色で整然と配列されているのは、感激でもあり、ありがたかった。また、ところどころに、この分類群は問題があるというようなコメントが挿入されていて、趣味ではなく研究のための図鑑という感じを与えるのも良かった。今でも図鑑としては出色のものではないかと思う。」

第2位・Manton I. ‘Problems of cytology and evolution in the Pteridophyta’(3名)「染色体と進化に興味を持ち始めたころ、この本に出会ったのがきっかけ。」

第3位. 西田誠 ‘タネの生い立ち’ と、Bierhorst, D.W. ‘Morphology of Vascular Plants’ (2名)。

残りは全て1名からの紹介です。神谷辰三郎 ‘シダの検索と鑑定’ 「たまたま手に入り、これをテキストとして郷里のシダを調べているうちに、私が敬愛していた従姉（伯父の長女で、若くして亡くなった）が、私がシダに興味をもって勉強を始めたことを喜んで、本屋で見つけた緒方正資の日本羊歯類図集(1)~(8)を買ってくれたこと。従姉への思いとシダへの思いが重なって、今でも強く胸に残っている」。杉本順一 ‘日本草本植物総検索誌 III シダ篇’ 「大学に入って少々まじめにシダの勉強をはじめてから大変お世話になった。僕らの仲間ではこの本を持つことがひとつのステータスになっていた。とにかく聞いたこともないような名前のシダが一杯載っていて、その名前を端から覚えたものだ。そして、採集した標本をもってK先生やN先生に初めはさっぱりわからなかったイヌワラビやイノデ類の名前を教えてもらったのが専門的にシダを勉強し始めた始まりである。学生時代は採集に行くのときは必ず携帯した本。しかし、実際にシダを調べるときにはあまり役に立たなかったように思う。でも持っているだけでシダが頭の中に入るような気がしたのは事実である」。志村義雄 ‘日本シダ植物生態写真集成’ 「生態写真の産地を参考にして採集に出かけたりした。あの頃はまだその場所に行けばたいがい目的のシダに合うことができた」。1970年前後の ‘Klekowski, E.J. の一連の論文’ 「シダの受精様式に関心を持ち始めていたところ、おまえの言いたいのはこうだろうと言わんばかりに、はるかに論理的ではるかに実証的な論文をぞくぞく出されてしまった。はじめはがっかりきたが、同業者がいることで、だんだん心強くなった」。Britten, J. ‘European Ferns’ 「5歳の時に父親からプレゼントされた。シダのカラー図版が何となくきれいだった。こうした刷り込みが、いずれシダに目を向けるきっかけになったことは否めない」。Copeland, E.B. ‘*Trichomanes, Hymenophyllum* and Genera Hymenophyllacearum’ 「線画も豊富で素晴らしいモノグラフ。常に傍らに置いている」。Shaver, J.M. ‘Ferns of the Eastern Central States with Special Reference to Tennessee’ 「線画・写真、テネシー州での分布図があり、各種に多くの文献がきっちりとついていて、シダ研究のきっかけというより、励みになった本」。

他に百瀬静男 ‘日本産シダの前葉体’、幾瀬マサ ‘日本植物の花粉’、東京営林局 ‘伊豆のしだ’、行方沼東 ‘シダの採集と培養’、西田誠 ‘陸上植物の起源と進化’、Gifford, E.M. and Foster, A.S. ‘Morphology and Evolution of Vascular Plants (翻訳:長谷部 鈴木 植田監訳「維管束植物の形態と進化」)」、Bower, F.O. ‘The Ferns’、Campbell, D.H. ‘Mosses and Ferns’、Copeland, E.B. ‘Genera Filicum’、Sporne, K.R. ‘The Morphology of Pteridophytes’、Ogura, Y. ‘Comparative Anatomy of Vegetative Organs of the Pteridophytes’、Stewart, W.N. ‘Palaeobotany and the Evolution of Plants’、Kato, M. ‘A taxonomic study of Athyroid fern genus *Deparia* with main reference to the Pacific species’ が挙がっています。

田川図鑑（私もこれに育ててもらいました。残念ながら絶版です）を約半分の方が挙げた以外はほとんどバラバラでした。現在羊歯植物を研究している人たちは、1冊の本から決定的なきっかけを受けたというわけではなく、様々なアプローチから研究に入られたようです。現在簡単に手に入る本はほとんどありませんが、図書館で手にとって若きシダ研究者達の思いを感じ取られてはいかがでしょう。

### シダ植物研究の魅力

皆様のご意見をまとめると「研究上有利で、内容が複雑で、未知のことが多く、系統的に面白く、神秘的で美しい」ということになりますか。個々の内容は以下の通りです。

1. 研究上の有利さ（6名）。「どんな時期でも（花の時期とかでなくても、冬や乾期でも）植物を採集できること、大体グループごとに生育する環境が決まっているので、始めて訪れた国々でも自分で植物を探して採集できることなど。樹木を研究している人などを見ていると、自分で材料が探せないでいる。自分でどんどん採集できないと、新しいことは見つかりにくいと思う。また人工交配が簡単に行えるのも魅力」「年間を通じてフィールドでの研究ができること、また栽培も容易であり、好きな時に好きな胞子が観察できること」「国内外の研究者が全体的に少ないこと。だから、きちんとした仕事を根気よく続けていけばそれなりに評価される。また、シダ植物は、種子植物には見られない特質をたくさん持っている。特に、生殖様式などはその最たるものであろう。だから、その特質を研究対象にすれば、毛色の変った研究を行うことができる」「シダの会のネットワークでどこに問題のシダがあるか、やろうと思えば、材料入手が容易であったこと」「配偶子嚢が裸出していて、生殖形質の情報が得やすいこと、証拠標本が作りやすいこと」「胞子体と配偶体が独立していることなど。例えば、種子植物で1個の花粉や1個の胚のうからDNAを抽出するには特別な工夫が必要になるが、シダ植物では前葉体を育てるだけで、葉とほとんど同じ要領で半数体のDNAが抽出可能」。
2. 染色体研究の楽しさ（5名）。「染色体や系統について、知られていないことがたくさんあったところ。こいつの染色体を世界で最初にみたのは自分だというのは結構快感だった」「高校の教師でも面白い発見ができるということ」「シダの細胞分類学的研究は減数分裂が見やすく、倍数性や無配生殖がからんだ問題を解決する手法として有効であったこと」「染色体が観察しやすいこと（数が多いけど）」「未知なことが沢山あって新発見の喜びに浸れる」「シダ植物群における倍数性の見事さに感動する」。
3. 単純な形態に潜む複雑さ（4名）。「種子植物の場合、花が非常に有効な指標となるので、典型的にまとまりやすい。それに対してシダ植物は生殖器官の形質が限られているため、どうしても栄養器官でシステムを論じることになる。類型化はしにくい反面、逆に、本当に自然な系統関係を年頭において追及するのが日常的になるから」「形が単純で形態情報が少ないので、一見、生物としても単純そうだが、地球上の幅広い



環境に適応して生きていること。また、少ない形態情報にもとづいて一通りの分類学的研究は終了しているが、詳しく調べれば奥深くて、際限なく興味深い事実が見つかること」「一般の人が見ればみな同じに見えるという地味な植物の中に見られる形態の多様性、歴史の古さや生活史の面白さ」「非常に複雑なこと。端から見るとどれも同じように見える葉っぱが、実際には非常に多様で長い歴史を持っていると思うと魅力的」。

4. 系統的面白さ(3名)。「被子植物につぐ大きな維管束植物群でありながら、もっとも原始的な維管束植物であるという二面性をもっているから」「シダ植物はこの地球上での最初の維管束植物であるため、シダ学では茎や葉、根の起源という、陸上植物の進化史上、最重要な問題を扱うことができる。大きなテーマを研究するんだという意気込みや興奮が心地よい」「種子植物とコケ植物を繋ぐ進化の架け橋としてのおもしろさ。多系統故の形態の多様性、歴史の古さ、生きるためにはなんでもやりそうなたたかさなど、シダ自体の魅力と、陸上植物を理解するうえで避けて通れない存在であること」。

5. 神秘さや美しさ(3名)。「深山幽谷に人知れずひっそりと育つシダに触れたとき、誰も知らない世界を知った気分になり、さらに子供の頃からの夢だった熱帯のジャングルのシダは、更にその魅力を増幅した」「形と色の神秘さ。同じような形をしているのだけど、まったく異なる種であったりすること、同じような色をしているようで、実は様々の色の変化があること。それらの見極めが自分のものになった時は目からウロコ状態だった」「葉のシンプルな美しさ、見かけ上はわかっているけど、実際にはいろいろと変化の見られる生活史や群落の盛衰など」。

6. その他(5名)。「花も実もないシダ植物は実用性に乏しい、経済的価値があまりない(例外もあるけれど)。実用性に乏しい分野は、お金にならないので学問としての純粋さを失いにくい」「シダ研究者には結構視野の広い人や変わり者がいること」「恐竜がいた時代からシダ植物は生えていたことを考えるとなんかロマンを感じる」「シダの精子がとてもかわいいので、交配実験等をするのがとても楽しい。被子植物ではこの楽しさは味わえない」「アルファ分類でもわからないものが沢山ある。名前のない形態型を一つ一つ解決するのが楽しい」。

次回は最終回、“自分がこれまでシダ植物分類学に残した功績のうち一押しのこと”と、“これまでシダ植物に無関心だった分類学会会員に勧める本や論文と簡単なコメント”をお伝えします。お楽しみに。

## コケ便り・臨時・

岡山理科大 西村直樹

コケに関する図書などが続々と刊行されています。コケへの関心が着実に広がることを願いつつ、皆様に臨時にお知らせします。

### コケ関係新刊図書

#### 万葉植物物語

広島大学附属福山中・高等学校編著，中国新聞社．2002年1月発行．157頁．1,500円（税別）．

万葉植物（139種）についてのオリジナルなカラー写真約200枚が掲載されています。読んでも見ても楽しくなる本です。コケも万葉植物の一つです。ご存じでしたか？

#### 新観察・実験大事典 生物編 植物 動物 野外観察 環境

新観察・実験大事典編集委員会（編），東京書籍．2002年3月発行 12,000円（税別）．

小・中・高の先生方が行える観察・実験が満載してあります。コケに関しては、植物の項に、「スギゴケの観察」、「ゼニゴケの観察」、「コケ標本の作り方」の3項目、さらに、野外観察 環境の中に、「校内のコケ植物」、「コケ植物を指標にした環境調査」、「コケ孢子への紫外線の影響」の3項目があります。総合的な学習、選択理科、課題研究にも活用できます。ご利用下さい。

#### 福井のコケと地衣・[補遺](福井県植物図鑑5)

福井県植物研究会編著，福井県発行．2002年3月発行．

福井県の蘚苔類約150種が扱われています。購入希望の方は福井県植物研究会の若杉孝生氏（910-0006 福井市中央2丁目8-27）に連絡を。

#### コケの手帳（のぎへんのほん）

秋山弘之（編），秋山弘之・伊村智・上野健・畦浩二・西村直樹・福田恵・本郷順子・南佳典・山口富美夫（著），研成社，2002年4月発行予定．220頁．1600円（税別）．

コケの面白さ、美しさ、不思議さをより多くの人々に知ってもらうことを願って、様々な分野の9人が執筆しています。さらに、より詳しくコケを知りたい方へのコケ解説や各種案内、また全国各地のコケ観察名所も掲載されています。

#### コケ文献データベース - 日本関係分 (Ver.1.01 CD ROM版)

蘚苔類研究会製作・発行．2002年3月．配布価格50,000円（日本蘚苔類学会会員特別価格5,000円）．

日本で2000年までに発表されたコケに関する文献情報約15,000件が収録されています。各データは、タイトル、著者、雑誌名、頁、発行年、分類区分やキーワード（研究分野など）の項目よりなり、ワープロソフトなどで検索することができます。このデータベースに関する問合せは、〒520 0224 大津市向陽町12-6 加藤研治氏（mokuren@mx.biwa.ne.jp）まで。



**編集後記**

春になり、野外観察や実験など、植物三昧の日々を過ごしていらっしゃる方も多いと思います。私もクスノキの研究を進めようと、春の到来を待ちわびていました。まずは、去年の秋にプランターに蒔いたクスノキの種が芽吹くのを待つて……。しかし、なかなか芽が出ません。変だなあ、とっていたある日。我が家のかわいいドラ猫が、プランターの上によっこいしょ、と香箱を作っているのを発見！く、何という猫！

かわいい大バカ猫を排除した後、待つこと2週間。今度こそ、たくさんの芽が生えてきました！大切に研究室に持ち込み、接写レンズをつけて撮影を……。あれ、葉鞘がついている……？！雑草の群れを押しつけて、愛しのクスノキが顔を出すのはいつになるのやら……。

みなさまも、失敗にめげず研究を続けておられることでしょう。笑える失敗、いえ、後学のためになる失敗がありましたら、ぜひ、ご投稿ください！

〒464-8601 名古屋市千種区不老町  
名古屋大学博物館  
西田佐知子  
電話：052-789-5764 ファックス：052-789-5896  
Email: nishida@num.nagoya-u.ac.jp

入会申込、住所変更、退会届、会費納入、購読  
申込などは下記へご連絡ください。

〒669-1546 三田市弥生が丘6丁目  
兵庫県立人と自然の博物館  
日本植物分類学会 高野温子（会計幹事）  
Phone 0795-59-2012, Fax 0795-59-2019  
E-mail: takano@nat-museum.sanda.hyogo.jp

平成14(2002)年5月15日印刷  
平成14(2002)年5月25日発行

編集兼 名古屋市千種区不老町  
発行人 名古屋大学博物館  
西田佐知子  
発行所 東京都文京区白山3-7-1  
東京大学大学院理学系研究科附属植物園内  
日本植物分類学会  
郵便振替 00120-9-41247